

委員会行政視察実施報告書

(視察箇所ごとに作成、行数は任意で追加)

委員会名	小中学校適正規模適正配置に関する検討特別委員会
参加委員 ◎委員長、○副委員長	◎後藤 誠司 ○長澤 勝幸 矢吹 哲哉 山口 文章 上野 利一郎 小島 雄一 菊地 とも子 齋藤 仁一 田中 雅人 山口 和男

1 本市の課題と視察の目的

現在、小中学校の適正規模適正配置については、本市においても重要な課題の一つと捉え、方針・計画等の策定が進められている。他自治体の事例を把握し、委員会の調査・検討の参考とするため視察研修を実施。

2 実施概要

実施日時	視察先	栃木県 矢板市
令和元年 11 月 7 日 (木) 13 時 17 分～15 時 03 分	担当部局	矢板市教育委員会 (教育総務課)
視察項目	小中学校適正規模適正配置の取組状況について	
報告内容	1 小中学校の統廃合について ○経過 平成30年6月 「矢板市立小中学校適正配置検討委員会 (諮問機関)」設置 平成31年1月 同委員会答申 現在 「矢板市立小中学校適正配置計画策定部会 (庁内会議)」で調査研究中 ○現状と今後 平成30年現在の児童生徒数2,383人が20年後に半減と予測。 現在、市内小学校8校 (小学校1校H31.3月閉校)、中学校3校。 校舎等は耐震補強工事は全校完了。しかし、過半数が築30年以上。 ○適正配置の考え方 ①学区の再編及び統合、②魅力ある学校づくり (小中一貫型)、③地域的配慮 (公的施設併設)、④通学距離・時間、⑤スクールバス 行政区と学区が合わない現状がある。 西小学校を矢板小学校に統合した。 ○施設ごとの適正配置 8小学校・3中学校⇒3小学校・2中学校・1小中一貫校 ○適正配置の時期 多くが既に小規模校である。段階的にできるだけ早い時期に進めることが望ましい。複式学級の解消や免許外指導の解消を最優先したいとのことである。	

	2 小規模特認校について 平成25年に豊田小学校、平成28年に泉小学校と泉中学校が小規模特認校指定された。小規模校において、児童の適性を生かした教育を推進するとともに心身の健康を図り、豊かな人間性を培い、併せて複式学級の解消を図ることを目的としている。現在3校。 ○矢板市の小学校小規模特認校制度 市内に居住している児童・生徒に該当し、希望があれば学区外からも入学・転入学・転学することができる。受入れ人数は、各学年7名以内。受入れ期間は、原則年度当初。受入れ期間は、受け入れた学年から卒業まで。 ○受入れの現状 豊田小：全児童47人中1人。泉小110人中7人。泉中67人中3人。 特認校についても、見直しが必要と考えている。泉中は矢板中への統合計画。 ○メリット、デメリット メリット：自然豊かな環境、地域と密接に接すること、少人数のため活躍の場が増えるなど。デメリット：保護者の送迎等負担、小規模校から、中・高校へ進む際のギャップなど。 3 総括 適正配置について、具現化の計画案策定には短い時間ではできない。10年から15年。市全体の施設配置計画もある。財政上の問題。建て替え・新設も考えられる。対象となる学校ごとの説明も必要。 アンケートは、総合的には統合に向けた結果が多かった（ここまできたら仕方がないなど）。 議会からは、早くスケジュールを示して欲しいと一般質問で指摘された。 適正配置計画がどうなるかで、現在の特認校がなくなること、新たな特認校などのこともあるが、未定である。西小学校は、特認校だったが閉校となった。 特認校導入の主たる目的は、複式学級の解消であったと思う。しかし、ニーズとしてそれほどあったのか。複式の解消にはならなかった。通学の大変さ、田舎の小さな学校に行くのかといった考えがあったのではないか。 3・5年生といった途中からの転入が多い。1年から入るのは少ない。大きいところになじめないといったところがあるのではと考えている。 （特認校の）周知については、積極的に行うというものではない。 泉小学校は、統合の方向性だったが、地域からの意見・要望等で残すような方向となった。公共施設配置計画も統合だった。片岡地区でも、地域性を考え、また近い将来では、子どもの減少があまりないということで小中一貫で残す方向。 市費配置の教員は市全体で35名いる。採用について、昨年までは県教育事務所との連携もあったが、今年度からは、市独自で採用（県は行わない）。
考 察 (まとめ)	

※視察先の写真、資料等の添付

